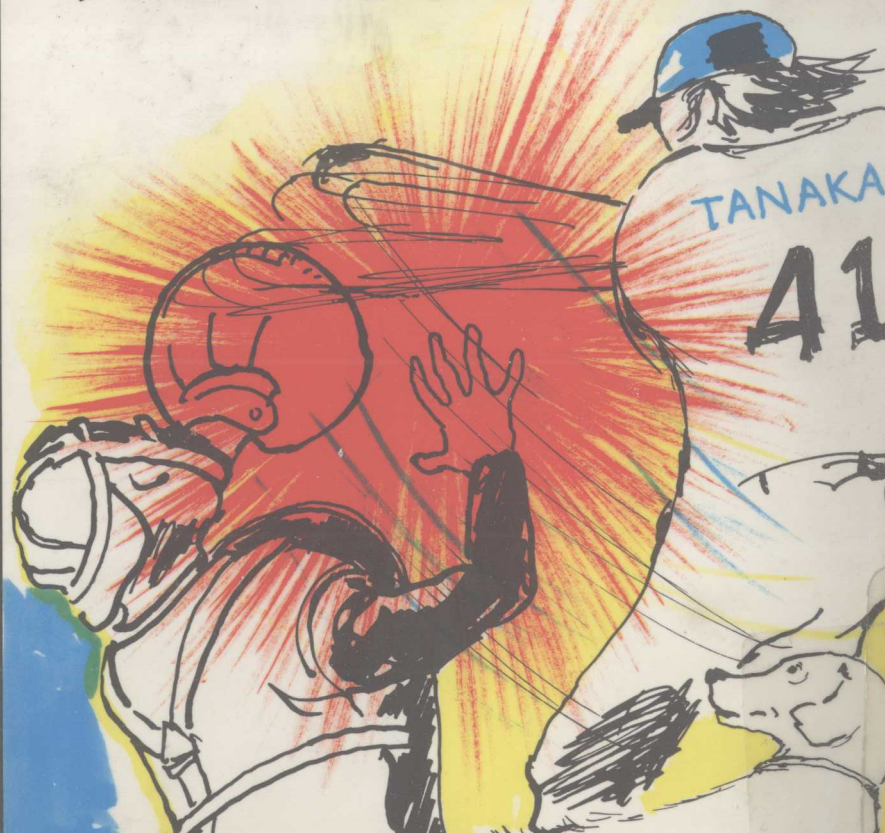


犬導盲求球予野 告白のチビ

井上ひさし



野球盲導犬チビの告白

©井上ひさし
一九八六

一九八六年十一月五月初版第一刷発行

著者 井上 ひさし

発行者 増田 義和

印刷 東京研文社

製本 共 文 堂

発行所 実業之日本社

東京 銀座 一―三―九
振替 東京 一―三二六
電話 東京 五六二―二〇五一(編集)
五三五―四四四一(販売)

犬導盲の告白 野球予備校

井上ひさし



野球盲導犬チビの告白 目次

プロローグ

9

サンチヨ・パンサ志願

27

大塚アスレチックスの星

44

蝙蝠傘

62

三宅大輔の夢

79

赤い選手

96

日本プロフェッショナル野球協約

114

契約

129

初登場

147

盲は立てり

166

合宿入り

185

眼科の敵

203

天才の生立ち

213

クロロホルムの甘い香り

豚雷光油とんらいこうゆ

首のない犬

匂い文字にお

六千万円のホームラン

予告つき勝越し満塁ホームラン

焦げた打球

ご主人様の爆弾宣言

日本はまっぷたつ

変化球の秘密

公式ボールは猪苗代産

神風が吹いた夜

方言の謎

223

232

242

252

261

271

280

289

298

307

317

326

336

ご主人様の生れ故郷

345

金剛杖の雪払い

354

暗殺予告

363

チビの失踪

372

選択の余地なき選択

381

最後の教え

390

開眼

399

野球盲導犬チビの告白

チビと呼んでくれないか。呼び捨てたりして気分を悪くするんじゃないか、だって。冗談じゃない、ぼくは自分をそんなに偉い犬だと思ってやしないんだ。偉大なのはぼくの主人の田中一郎一壘手であって、ぼくは田中選手の単なる付添い、ただの盲導犬さ。自分の「分」は心得ているつもりです。かまわないからぼくをチビと呼んでくれ。みんなもぼくをそう呼んでいるんだし、遠慮はいらないよ。みんな、というのはもちろん横浜大洋ホエールズのみなさんのことだ。御大の別当監督以下、みなさん全員が「チビ」と呼んでくださっている。巨人の王さん、張本さん、柴田さんなんかもチビって呼んでくれる。柴田さんとは仲よしでね、一壘から二壘まで駆けっこしたことさえあるんだ。大洋Ⅱ巨人戦のはじまる前、まだお客さんがスタンドに入っていないときにだけどね。勝ったさ、当り前よ。いくら向うがセントラルの盗塁王でも、しょせんは二本足だ、こっちは雑種のチビ犬だが四本足。二本足に負けるわけがない。

「チビは、ほんとうに速いや」

二壘ベースにお坐りして競争相手（つまり柴田さんのことだ）の到着を待っていたぼくに赤い手袋の盗塁王はいったものさ。

「たいしたものだな。ほれ、ごほうびだよ」

ポケットからビニールに包んだ骨付き肉を出してぼくにボーイと投げてください。親切だね、柴田選手は、だって。ところがそうじゃない、彼はそのときぼくを買収しようとしたんだ。ぼくの主人の田中さんが例の、いまじゃすっかり有名になっちゃった「電光ライナー」で右中間を抜く。主人はごぞんじのように目が不自由です。一塁ベースを踏み、二塁へ辿りつくには盲導犬のぼくの案内が要る。柴田さんはぼくを骨付き肉で手なずけておき、ボールを追うのは柳田さんに任せて自分は二塁ベースの方へやってきて、

「やあ、チビ。骨付き肉をやるからそこで止まっていろよ。いいか、いま出してやるぞ」

なんていってぼくを二塁ベースの手前で止まらせ——ぼくが止まれば主人の田中さんも止まってしまう、これは改めていう必要もないでしょう。ぼくが田中さんを先導しているんだから当り前です——、柳田さんからの返球を受けてタッチアウト、これを狙っての懐柔作戦なんだ。ぼくには最初から読めます。だから骨付き肉なんぞ、見向きもしなかった。ただ、そのへんに骨付き肉が転がっていると気が散るし、まさかのときに備えるというつもりもあってその骨付き肉は横浜球場の二塁ベースの後方、中堅手の守備位置の前方、そのへんに埋めておきました。まだ埋めてあるはずだ。なんなら掘ってごらんさない。

巨人では、長島監督もチビって呼んでくれるな。でもさ、チビチビっていかにも「可愛い犬だなあ」みたいな犬撫で声を出すでしょ。だからこっちもついほだされて傍へ寄って行くのよね。すると途端にスパイクで蹴つとばすんだよね、あの長島って人は。気持はわかる。今年、昭和五十四年度のベナントレースで巨人はわが大洋に八つも負け越している。巨人の九勝一七敗〇分。巨人がこの昭和五十四年度の、セントラルのお山の大将の座を大洋に譲らざるを得なかったの

も、大洋と二六回戦って九回しか勝てなかったせいだ。そして——いい、ここが肝腎なところなんだけど、巨人一七敗のうちの、すくなく見積っても一〇敗は、ぼくの主人の田中一郎一塁手のバットが原因さ。

○・四七四

打率	一三〇
試合	六〇二
打席	四一一
打数	一四二
得点	一九五
安打	三〇
二塁打	一五
三塁打	五六
本塁打	四二三
塁打	一七〇
打点	二一
盗塁	〇
盗塁死	〇
犠打	〇
犠飛	八二

四球

一〇九

(うち敬遠)

(九二)

死球

〇

三振

〇

併殺打

〇

これが主人の昭和五十四年度の成績。まあ、みなさんとはつくのむかしにごぞんじの成績表だけど参考までに掲げさせていただきます。太字の成績、なんだかわかりますね。シーズンの最多記録ですわ。これまでのシーズン最高打率は昭和四十五年、当時東映にいた張本勲さんの〇・三八三四、これを主人は軽々と破っちゃった。また、これまでのシーズン最多安打は阪神の藤村富美男三塁手の一九一本だった。主人はこれを四本も追い越しちゃった。さらにシーズン最多本塁打——王さんが昭和三十九年に記録した五五本——も更新、昭和二十五年に松竹ロビンスの小鶴誠外野手のたてた三七六のシーズン最多塁打、同じ年に同じ小鶴のつくったシーズン最多打点一六一点も書きかえちゃった。とくに主人は巨人戦になるとよく打った。主人の対巨人戦での記録は、

打率

〇・八二一

試合

二六

打席

一二一

打数

六七

得点	三	八
安打	五	五
二塁打	一	〇
三塁打	五	
本塁打	二	一
塁打	一	三
打点	五	七
盗塁	七	
盗塁死	〇	〇
犠打	〇	〇
犠飛	二	〇
四球	三	四
(うち敬遠)	(三)	(一)
死球	〇	
三振	〇	〇
併殺打	〇	

いやもうすさまじい当り方。これは噂だから責任は持てないけど、長島監督が堀内さんや新浦さんや加藤さんなんかに、

「おい、明日の大洋戦、おまえの先発で行くからな」

と告げると、三人ともおいおい泣き出すんだって。わかる気がするなあ。敗戦投手になるのは決まったようなものだし、通算防御率はさがるし、だれだって泣きたくなる。まあ、そういうわけで巨人の選手にはずいぶん蹴っとばされちゃった。とくに長島監督には十五、六回はやられたんじゃないかな。

ぼくのことを一番しつつこく苛めたのはシピンだな。この男には「さん」はつけない、いや、絶対につけたくないんだ。憶えてるかな、去年の大洋Ⅱ巨人戦で、この男がうちの門田さんに襲いかかった事件を。一回目の打席で死球を喰らった。二回目の打席に内角の球がつづけてきた。そうしたらこの男、いきなり門田さんにバットを投げつけ、マウンド向って駆け出した。門田さんを二塁ベース近くまで追いかけ、とうとう追いつきとびかかった。バカだ。イモ、サバ、三流、ドジ、間拔けてのは、この男のためにあることばじゃないかと思う。だって野球ってのはたがい相手の弱点を攻めっこするゲームじゃないか。投手の守備が拙そうならバント攻めにする、捕手が弱肩ならどしどし二塁へ、また三塁へと走る。張本左翼手のところへ飛球があがる。三塁コーチヤーは張本の肩の弱いを見越して三塁走者を本塁へ突っ込ませる。一方、投手は打者の泣きどころを攻めたてる。そういうものですよ。門田さんがシピンの内ぶところにつづけざまに投げたのはごくごく普通の作戦です。前の打席で死球を喰ったとはいっても、そのお返しに一塁へ行かせてもらったのだから五分と五分、貸し借りなしの痛み分けです。将棋の名人戦で、相手に二回連続して桂馬で「王手飛車取り」「王手角取り」とやられたからって相手に殴りかかる棋士がいるだろうか。もしいたら棋士の資格を剝奪されてしまうんじゃないかしらん。だいたい、

そんなに死球がいやなら当る寸前に身体を躲^かせばいいんだ。ぼくの主人をみてごらんさい。盲目の打者なのに死球はシーズンを通して零ですよ。近い球は避けて好球はのがさず打つ。それでこそプロ野球の選手でしょ。球をよけるのも打者には大切な技術。その技術のないのを棚にあげて相手投手に殴りかかったりしてはみっともない。でも今シーズンのシピンは哀れでしたね。ぼくの主人ときたら、味方の投手が門田さんという試合に限って、それこそ火の出るようなライナーをシピンの顔面めがけて叩きつけるんです。いつかの試合なんぞ、四打数四安打、その四安打がすべて二塁手シピンの顔面に命中するライナーの二塁強襲安打。最初のがシピンのあの尖^とがった顎をガン、二打席目のが鼻の頭にゴチン、三打席目のがおでこヘデコン、四打席目のが口の中へガギッ。シピンの前歯が七本折れたそうです。え？ 正確には八本折れた？ 義歯代が二十五万？ それならなお結構。とにかくあれ以来シピンはぼくの主人が打席に入るとそのたびに捕手用マスクをかぶり十字を切りながら震えている。二塁手が捕手用マスクをかぶって守備につくなんて前代未聞ですが、これも主人の当りがいかに痛烈であるかということの一例といえるんじゃないかな。シピンがぼくを苛める理由はこれでおわかりでしょ、ぼくと主人は一心同体、ぼくの横ッ腹を蹴^うつとばすことで、シピンは主人に仕返しをしている気になるらしい。

○

○

どのようなにして盲目の天才打者・田中一郎とぼくとは知り合ったか、これについてお話するのが本日の眼目ですから、雑談を切り上げてさっそくそのことにかかりましょう。

今年の春のお彼岸までぼくは千葉県習志野市のさる植木屋に飼われていました。ここの次男坊